

スピンスターいかに生きるべきか ——作品に隠された Charlotte Brontë とのやりとり——¹

閑田 朋子

1 仮説

1801年・1851年の国勢調査によって女性の人口が男性の人口を大きく上回ることが明らかになり、スピンスター（未婚女性）の増加が社会問題として取りざたされた時代に²、Elizabeth Gaskell と Charlotte Brontë は、スピンスター、特にオールド・ミスがいかに生きるべきかという問題に深い関心を寄せた作家である³。本論は、この二人の女性作家が、オールド・ミスの生き方について登場人物の名前を暗号として用いて — 例えば、相手の作品の登場人物と同じ、または類似した名前の登場人物に別の主張をさせるといった方法で — 作品を通して意見の交換を行っていたことを仮説とし、そのやりとりを概観することを目的とする。

もともと Brontë は名前にこだわりを持った作家である。ブロンテ姉妹の初期のペンネームには、Charlotte Brontë は Currer Bell、Emily Brontë は Ellis Bell、Anne Brontë は Acton Bell というように、本名の頭文字ともう一文字が組み込まれている。また、Shirley(1849)の二人のヒロイン Caroline と Shirley のモデルは Charlotte の二人の妹 Anne と Emily であると言われているが⁴、Caroline の名には Anne の 3 文字と Charlotte の 6 文字が、Shirley には Charlotte と Emily の音が組み合わされている。二人の妹は本作執筆中に死亡しているため、妹と自身の名を組み合わせた名前からは、妹たちといつまでも共にありたいという Charlotte の願いがうかがわれる。一方 Gaskell は、先行作品のある場面を書き直し、その作品を主に登場人物の名前によって示唆する手法を多用する作家である⁵。他作家の作品に限らず、Gaskell は自身の作品にもこの手法を用いている。例えば Mary Barton (1848) の労働組合員 John Barton は、North and South (1855) の工場主 John Thornton に変換され、純粹で朴訥な Bar は、頭が良く合理的なゆえに鋭く人を刺す Thorn へと姿を変える。

このように名前に意味を込める二人の作家が、互いの作中のある部分を書き直

すことで相手に反論し、その書き直しを登場人物の名前によって示唆したと仮定しても、あながちあり得ないことではないだろう。

2 はじまり — “Libbie Marsh’s Three Eras” と *Shirley* —

二人の作家のやりとりを、Gaskell の初期の作品 “Libbie Marsh’s Three Eras” (1847, 以下 “Libbie”) から見て行こう。家主の娘 Anne はお針子の Libbie に、“you’re as born an old maid as ever I saw. You’ll never be married to either drunken or sober” (1:66) と言う⁶。己の醜さを自覚する Libbie はこれを認め、結婚して家庭を持つかわりに隣人のために自分を生かす決意を語る。しかし Anne は “That’s all very true. . . for them as is to be old maids; but as I’m not” (1:66) と答える。Libbie ほど醜い容姿を持つ例は特殊であり、一般の女性には当てはまらないことを含意するこの言葉は、Anne が完全には納得していないことを示している。

おそらくは Anne という名前が「一人」(An=One) もののオールド・ミスを連想させるため、そして未婚のまま亡くなった妹の名と偶然に一致したために、Brontë はこの名を用いてオールド・ミスの生き方について、一面識もない “Libbie” の作者に問いを發したのだろう。*Shirley* の第十章の章題は “Old Maids” であり、それぞれが Anne のうちの 3 文字をその名に組み込まれた二人のオールド・ミス Miss Mann と Mary Ann Ainley が登場する。ヒロイン Caroline は Robert への片思いに疲れ自分は一生を未婚で終わるだろうと予想し、身近にいるオールド・ミス Mann と Ainley に改めて目を向ける。

この章には、女性の美醜と結婚の関係がとりあげられている。オールド・ミスの Mann も Ainley もともに醜い。一方 Caroline は若く美しいため、メイドの Fanny は彼女に “You’ll not be an old maid. . . there are no signs of an old maid about you” (176) と断言する⁷。この Fanny の言葉を、醜い Libbie を生まれつきのオールド・ミスだと断言する Anne の言葉と併置すると、美醜に左右される女性の運命の残酷さが浮かび上がる。Libbie は、オールド・ミスとして他者に奉仕する使命を己に与えたのは神の御心だと考える (1:66) が、Robert は醜いオールド・ミスは自然の気分 (the mood) の産物だと言う (177)。偶然の産物である美醜に運命を支配されるならば、女性は運命に翻弄される無力な存在でしかない。

Brontë は美醜と自己犠牲の問題を密接に関連づけて提示している。Mann はそ

の名に「男」という単語が含まれているように、女性らしからぬ女性である。醜く口やかましい彼女は、人間でさえないメデューサ (178) やゴブリン (179) にたとえられる。だが Mann は、“a most devoted daughter and sister”(180) として休みなく家族を看病していたために結婚することができず、苦労がたたって醜く不愉快な老女になったのだ。Libbie は他者に奉仕するうちに精神の気高さが顔に出て美しいとさえ言えるようになる (1:69) から、Libbie と Mann の人生の因果関係・時系列は、醜さが人生の出発点と終着点になり、献身がそれぞれ美と醜に至るように、ちょうど逆に配置されている。もう一人のオールド・ミス Mary Ann Ainley は、Libbie と同様に生来醜いが貧しい人々への奉仕に生きる立派な女性である。だが Libbie の奉仕が愛と尊敬で報いられる (1:69) のと対照的に、Ainley の親切な行いがこの世で報いられることはほとんどなく、彼女の親切に慣れきった貧しい人々はほとんど礼すら言わない (182)。

Mann と Ainley に注目した Caroline は、他者への奉仕に生きるオールド・ミスの生き方を、それなりに正しいと認めるが、若さ特有の鋭さでそこに社会の欺瞞を嗅ぎつけ、「とても便利な信条」だと一刀両断する。

I shall never marry. I shall never marry. What was I created for, I wonder? What is my place in the world?” “Ah! I see . . . that is the question which most old maids are puzzled to solve: other people solve it for them by saying, ‘Your place is to do good to others, to be helpful whenever help is wanted.’ This is right in some measure, and very convenient doctrine for the people who hold it. . . . Does virtue lie in abnegation of self? I do not believe it. (174, 下線は執筆者による。)

他になすべきことも見つからないので、Caroline は自分も他者への奉仕に生きようとその場しのぎの結論を出す、彼女に Libbie のような心の平安はもたらされない。語り手は“I must speak truth” (184) とわざわざ明言してから、彼女が Robert を思い切れずに心身とも一層消耗していくことを述べる。他者への奉仕が自己の精神の救いにはならないのだ。

このように Brontë は、Libbie の献身的な生き方の裏面を見せることで、美醜によっ

て女性をカテゴライズする社会の酷さを、偶然の産物である美醜が女性の運命を定める理不尽を、女性の自己犠牲を利用する家族や社会のずるさをつきつけていく。Brontë は、Libbie の生き方には納得が行かないと、一面識もない“Libbie”の作者に訴えているのだ。ここには、女性の運命は美醜次第ではないか、他者への奉仕に生きる女性は家族や社会によって自己犠牲の美名の下に搾取され自己消失するのではないかという Brontë の問いがある。

このとき Charlotte は、作中に Anne の名以外にも様々な暗号を織り込んで、“Libbie”の作者に迫る。例えば“Libbie”の第二の時節の題名は“Whitsuntide”で、Libbie や Frank はカナリアを連れて森に出かける。*Shirley* の第 16 章の題名も同じ“Whitsuntide”で、20 羽のカナリアが登場する。例えばどちらの作品にも同姓同名の Margaret Hall が登場する。例えば“Libbie”の Frank Hall がプレゼントされた花を聖書に挟んで押し花を作れば (1:52)、*Shirley* の Cyril Hall もプレゼントされた花束の中から聖書に（押し葉のようなものを記念に作るために）小枝を挟む (285)。例えば“Libbie”で Anne が Margaret を“such a tartar”(1:69) だと言えば、*Shirley* には Tartar という名のブルドックが登場する。ロやかましい Margaret が息子にだけは優しくなったように、Tartar は凶暴な犬だが飼い主には忠誠を尽くす。Gaskell は“I disliked a good deal in the plot of Shirley(sic.)”と手紙に書いているが⁸、カナリアを 20 羽に増殖され、Margaret をブルドックにされたのでは無理もない。

3 Gaskell からの返事—“Morton Hall”と“My French Master”—

Shirley が出版された翌年（1850 年）に、Brontë と Gaskell は初めて知り合うが、Brontë の謎かけに気づいた Gaskell は、同じように Anne の名を用いて作品を通じて問いに答えている。“Libbie”と *Shirley* の両作品に登場した Margaret Hall の名が *North and South* の一文字違いのヒロインの名 Margaret Hale に引き継がれる一方で⁹、名の頭文字と姓の Hall は 1853 年 11 月に発表された“Morton Hall”（以下“Morton”）に託される。“Morton”には、Annabella という名のオールド・ミスが登場する。Anne の名とブロンテ姉妹のペン・ネーム Bell を含めた名前だ。美しい Annabella は、地位と財産とを兼ね備えた男性と結婚して一族に富と名声をもたらすものと家族に期待される。家族は、苦労が顔に出て美貌を損なっては大変と彼女を甘やかす。だが Annabella は結婚できず、やはりオールド・ミスになった

姉と妹から家族に対する義務を怠ったとなじられ続け、ついには赤ん坊の頃に天然痘で顔が醜くなっていれば良かったとさえ望む (3:48)。これが、女性の運命が美醜に左右される理不尽を訴えた Brontë に対する Gaskell の返事である。美貌が必ずしも愛と幸せな人生を約束するものではないと答えているのだ。

実のところ、Morton 一族の美貌の女性は全て不幸になる。ただ一人幸せな結婚をする Cordelia Mannisty は、“too sad and grave a look” のために “pretty”(3:51) ではないが、それは早くに両親を亡くし、一癖も二癖もあるオールド・ミスの伯母 3 人に尽くし、その中で忍耐や悲しみを学んだためであろう。家族に甘やかされた美しい Annabella ではなく、伯母たちに尽くす Cordelia が幸せな結婚をするのは、*Shirley* で家族の面倒を見続けて婚期を逃し醜いオールド・ミスになった Mann の物語の書きかえである。Brontë が Anne から Mann へと書きかえた名を、Gaskell はさらに Mannisty に変えて幸せな結婚をさせることで、他者への献身が必ずしも自己喪失や不幸に通じるのではなく、むしろそれは自己の確立にいたる一環であると答えているのだ。

Gaskell は、“Morton” を発表した一ヵ月後 (1853 年 12 月) に “My French Master” (以下 “Master”) を発表する。Charlotte はこの題名を見て、すぐにそれが自分に宛てられた作品だと悟ったのではないだろうか。かつてフランス語の作文の指導を受けた修辞学の教授 Constantin Heger に苦しく激しい片思いをして以来、French master は、Brontë の作品においてヒロインの愛の対象となる男性のアイコンになっていたからだ。*Shirley* の Caroline はフランス語を教えてもらった Robert と、*Shirley* は元フランス語の家庭教師の Louis と結婚する。*Villette* (1853) でも、ヒロイン Lucy Snowe が愛する男性 Paul Emmanuel は彼女にフランス語を指導する。*Shirley* と “Master” は設定そのものも類似している。*Shirley* では混血の Robert がヒロイン Caroline にフランス語を教え、“Master” では外国人の Chalabre が語り手にフランス語を教える。そして Robert が借金を返そうと必死で働くのも、Chalabre が落ちぶれてフランス語を教えなくてはならなくなったのもフランス革命が原因である。さらに Gaskell の “Master” の French master の名 Cha-l-a-br-e には、Charlotte Brontë の名前の 6 文字が組み込まれているので、彼の大叔母の名 Anne-Marguërite de Chalabre は、「Charlotte Brontë の Anne と Margaret」という意味になり、*Shirley* で Brontë が用いた Anne と Margaret の名前の謎かけを指摘する暗号になる。

Brontë の常套的な筋と異なり、Gaskell の “Master” で French master と結婚するのは、生徒の「私」ではない。Shirley は、結婚相手に尊敬できるが怖いとさえ思える master（ご主人様）を望む。

Did I not say I prefer a *master*? One in whose presence I shall feel obliged and disposed to be good. One whose control my impatient temper must acknowledge. A man whose approbation can reward—whose displeasure punish me. A man I shall feel it impossible not to love, and very possible to fear. (*Shirley*, 552)

これに対して Gaskell は、貴族出身の French master をフランス語を一言も解さない無学な農夫の娘 Susan（またもや Anne の名が組み込まれている）と結婚させる。Susan は夫を畏怖の対象とし最高神ジュピターのように崇め奉る。master のフランス語である monsieur を正しく発音できない彼女が “Moussire” と繰り返して夫を呼ぶとき (3:64)、それは Brontë に放たれた痛烈な皮肉の矢となる。

Susan と Chalabre の間に生まれた娘には、母親と同じ Susan の名がつけられる。彼女は 28 歳のオールド・ミスになり、愛徳会修道女になることを望むが、皮肉にも「年をとりすぎている」ために断られる (3:69-70)。Libbie は、オールド・ミスとして他者に奉仕する使命を己に与えたのは神の御心だと考える (1:66)。Brontë は *Shirley* 第十章でこのようなオールド・ミスの生き方をローマ・カトリックの「愛徳会修道女の行為」(182) にたとえるが、同章で Caroline にローマ・カトリックに他者の自己犠牲を利用する暴君がいることを述べさせている (174)。そして Gaskell の “Master” では、Susan は愛徳会に希望しても入れない。Gaskell と Brontë のこのような愛徳会をめぐるやりとりは、オールド・ミスの他者への奉仕は、神の使命なのか、美德の名の下に女性の自己犠牲を搾取する社会に踊らされているだけなのかという押し問答となっている。神からの使命であれば、Libbie が妻・母としての “women’s natural work” から「締め出された」(1:66) ように、Susan のようにオールド・ミスの使命から締め出される場合もあることになる。愛徳会に入れなかった Susan は、結局は結婚する。

ここで、Charlotte の実人生に話を移す。相次いで弟妹を亡くし、父親と残された 36 歳の Charlotte に、1852 年 12 月に Arthur Bell Nicholls がプロポーズをする。

父親は激怒し¹⁰、彼女自身も“a sense of incongruity and uncongeniality in feelings, tastes — principles”を抱いたために乗り気ではなく¹¹、Nichollsを平凡で退屈だと感じていたようだが¹²、様々な要素が相まって気持ちが動いたようだ¹³。BrontëはNichollsの手紙に返事を書き、父親に秘密のままNichollsに会う。53年9月19日にGaskellはBrontëを訪問し、4日間の滞在中にこの件を打ち明けられ¹⁴、以後、二人の縁結びにあれこれと手を尽くすことになる¹⁵。

この約3ヵ月後（同年12月17・24日）に連載された“Master”も、Gaskellの「縁結び」の一環として読むことができる。French masterであるChalabreが、生徒の「私」ではなく無学な農夫の娘Susanと結婚するのは、「夫としてご主人様(master)を求めるなどという悪趣味な男性崇拝はおやめなさい」というGaskellの助言である。Gaskellが“I mean that [Charlotte] would never have been happy but with an exacting, rigid, law-giving, passionate man”と見抜いたように¹⁶、Brontëの作中でヒロインが愛するFrench masterたちは程度の差こそあれ一様にこの性格で¹⁷、一方Nichollsは、結婚後にCharlotte自身が“truthful, honourable, and unboastful man”だと述べるように¹⁸、それとは異なったタイプの男性であった（少なくともそのように見えた）。Gaskellは「ご主人様」タイプとは違った男性、つまりNichollsを暗に勧めたのだ。

さらには、SusanとChalabreの娘の名Susan Chalabreは、Susanの名前に含まれるanが「オールド・ミス」「一人」を、ChalabreがCharolotte Brontëを意味する暗号であることを考えると、「オールド・ミスで一人ぼっちのCharlotte Brontë」という意味になる。そのSusanが愛徳会に入れずに結婚するのは、「神はあなたをオールド・ミスの使命から締め出しているのだから、ご結婚なさい」というユーモアを込めたメッセージともとれる。

Gaskellの縁結びのかいもあって、BrontëはNichollsと結婚するが、Gaskellの“Master”は私信の要素が強すぎて失敗作になったように私には思われる。いずれにせよ「オールド・ミスいかに生きるべきか」というCharlotte自身の問題にはここで幕が下りる。

4 結論—オールド・ミスが語り手となるとき—

Brontëは、“Libbie”の作者に向けてShirleyを通して、女性の運命は美醜次第で

はないかという問いと、愛も感謝も与えられない自己犠牲は、他者に都合よく利用されるだけの自己消失ではないかと問いを發した。美醜の問題について Gaskell は “Morton” の Annabella と Cordelia を通じて、美しさは幸せな結婚を必ずしも意味しないと答えた。自己犠牲の問題についても、彼女は Annabella と Cordelia の対照的な人生を描くことによって、それは自己の（消失ではなく）確立の一環であると答えたのだが、むしろこれについてより説得力を持つ Gaskell の返事は、同作と “Master” の語り手をオールド・ミスに設定したことである。同時代の男性作家によるスピンスターの語り手と言えば、Charles Dickens の *Little Dorrit* (1857) に登場する Miss Wade をまず思い出すが、彼女の物の見方は著しくゆがんでいる。それとは異なり、特に “Morton” の語り手 Bridget は、多少は滑稽な偏見にとらわれているものの、全体としては優れた観察眼を持ち、Morton 一族の女たちばかりでなく、男たちをも優れたバランス感覚で語っていく。また、“Morton” と “Master” の語り手は、自らの私生活をも語っている。親に先立たれ老女となったオールド・ミスが、家父長制の強いる女性の役割を逃れて、娘でも妻でも母でもないただ一個の人間として¹⁹、己をも他者をも生き生きと語るとき、社会の周縁部の存在だった彼女たちは、物を見る確かな主体、すなわち世界の中心となる。オールド・ミスであれ、どのように弱い立場にある者であれ、自分で判断し自分の価値観で語る存在が自己を喪失することはないと、Gaskell は答えているのだ。

当時「語ること」「書くこと」は女らしくない自己主張の一種であった²⁰。“Morton” の Bridget も、物語を書き綴ることをはじめは慎みから躊躇する (3:23-4)。その上彼女は、間違いがないように書きあがった物語を牧師補に見てもらったと言う (3:24)。けれども実際には、学識ある男性が物語を確認したあとは全く見られない²¹。例えば Bridget は geography に似た単語 (genealogy) を思い出せないが、その語が補われることはない。

Bridget が男性に最終的な判断を委ねたかのように言いながら、実はすっかり自分の考えを語るように、「書く」という慎ましくない行為をする女性作家たちは、ペンネームのペルソナをかぶることで、より自由にものを語ることができた²²。Charlotte は Currer Bell と、“Libbie” 発表時の Gaskell は Cotton Mother Mills Esq. と名乗っているが、彼女らは筆「名」だけではなく、さらに用心深く登場人物の「名」に暗号を用いて、オールド・ミスが生きる目的について論じ合ったのだ。当時、

弟妹を次々に亡くし孤独と痛む身体に苦しむオールド・ミス Charlotte には、“Libbie” があまりに楽天的で偽善的な話に思えたのだろう。だが面識のない Cotton Mills Mother Esq. に表立って反論することは危険であった。場合によっては偶然だと白を切るには、「名前」に暗号を含ませるのは上手いやり方であった。

一方 Gaskell が Brontë と面識ができた後も暗号に暗号を返す形で返事をしたのは、当時の女性らしさの規範に照らせば言えないことを言える自由を、暗号が与えてくれることに気づいたからではないだろうか。散りばめられた暗号は、ブルドックにされた Margaret や、monsieur を正しく発音できない無学な Susan など、痛烈な皮肉の応戦である。彼女たちは、暗号の陰で、鋭い批判精神と痛快な攻撃性を存分に発揮している。

しかしこのような攻撃的な応戦が、二人の女性の友情を損なうことはない。“Master” には、語り手の母親が当人に気づかせまいと子供の名前に暗号を用いて父親に話をする場面がある (1:59)。だが父親はそれになかなか気づかず、当の話題の対象である娘の「私」が先に気づく始末である。父親（すなわち男性）になかなか通じないこの暗号は、それが女性のものであることを示している。女性だからこその暗号は、仲間内で使うジャーゴンのように二人の結束を高め、Brontë と Gaskell は、皮肉の応酬を楽しめるほどに、そして Brontë の結婚問題に Gaskell が口を挟めるほどに、親しい存在となっていくのではないだろうか。

注

- 1 本論文は、日本ギヤスケル協会例会（2008年5月31日、於実践女子学園渋谷キャンパス）のシンポジウムで口頭発表した原稿をもとにしたものである。
- 2 J. A. and Olive Banks, *Feminism and Family Planning in Victorian England* (Liverpool: Liverpool UP, 1965) 27-8. Elizabeth K. Helsinger, Robin Lauterbach Sheets, William Veeder, *The Woman Question : Defining Voices, 1837-1883*, vol.2 (Manchester: Manchester UP, 1983) 135. Merryyn Williams, *Women and the English Novel, 1800-1900* (London: Macmillan, 1984) 3-5, 36-8. “spinster” の語の由来や意味の移り変わりと、17-8世紀におけるオールド・ミスの存在については、Ian Watt, *The Rise of the Novel : Studies in Defoe, Richardson and Fielding* (London : Hogarth, 1987) 144-6 を参照。

- 3 Williams, 109-11.
- 4 Winifred Gérin, *Charlotte Brontë: The Evolution of Genius* (Oxford: Clarendon, 1967) 390.
- 5 拙論「Mary Barton: そのモデルと種本」『ギヤスケル論集』12 (2002):61-2 参照。
- 6 Elizabeth Gaskell の作品からの引用は全て *The Works of Elizabeth Gaskell*, ed. Joanne Shattock, 10 vols. (London: Pickering & Chatto, 2005-6) から行い、本文中にその巻数・頁数を表記する。
- 7 本作品からの引用は全て *Shirley*, ed. Herbert Rosengarten and Margaret Smith, intr. Smith, with chronology by Sally Shuttleworth (Oxford: Oxford UP, 2000) に準拠し、本文中にその頁を記載する。
- 8 Elizabeth Gaskell, “To Lady Kay-Shuttleworth,” 14 May 1850, letter 72 of *The Letters of Mrs Gaskell*, ed. J.A.V. Chapple and Arthur Pollard (Manchester: Manchester UP, 1996) 116.
- 9 *Shirley* から *North and South* への暴動場面の書きかえについては、拙論「暴徒を前にしたマーガレット — 『シャーリー』を下絵として『北と南』第二十二章を読み解く —」『イギリス小説の探究』(日本大学イギリス小説研究会編、大阪教育図書、2005) 63-81 参照。
- 10 Charlotte Brontë, “To Ellen Nussey, 15 December 1852,” *The Letters of Charlotte Brontë*, ed. Margaret Smith, vol.3 (Oxford: Clarendon, 2004) 92-3.
- 11 Brontë, “To Ellen Nussey, 18 December 1852,” *Letters of CB*, 94-5.
- 12 Brian Wilks は「退屈」(*The Brontës: An Illustrated Biography*, London : Hamlyn , 1989 [ブライアン・ウィルクス『ブロンテ：家族と作品世界』白井義昭訳、彩流社、1994、274])、Juliet Barker は「平凡」(*The Brontës*, London: Weidenfeld and Nicolson, 1994, 745 [ジュリエット・バーカー『ブロンテ家の人々』下巻、中岡洋・内田能嗣監訳、彩流社、2006、537]) という表現を用いている。
- 13 Brontë, “To Ellen Nussey, 2 January 1853,” *Letters of CB*, 101. Barker, 712-3, 745.
- 14 Brontë, “To Mrs Gaskell, ?18 April 1854,” *Letters of CB*, vol.3, 246. Barker, 741.
- 15 Barker, 741-2.
- 16 Gaskell, “To John Forster” [23 April 1854], letter 191 of *Letters of Mrs Gaskell*, 279.
- 17 Williams, 92-3, 94.

18 Brontë, “To Margaret Wooler, 10 July 1854,” *Letters of CB*, vol.3, 276.

19 Robin B. Colby, “Some Appointed Work to Do”: *Women and Vocation in the Fiction of Elizabeth Gaskell* (Westport, Conn. : Greenwood, 1995) 4-5.

20 Williams, 13-6.

21 Bridget の知識の欠如や多少の滑稽な偏見は、女らしくないと反感を買いかねない彼女の鋭い観察眼や確かな判断力から、読者の注意をそらす目くらましとなっている。

22 Williams, 13-6.

Selected Bibliography (注であげたものは割愛)

Auerbach, Nina. *Communities of Woman: An Idea of Fiction*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1998.

Gaskell, Elizabeth. *The Life of Charlotte Brontë*. London: Pickering&Chatto, 2006.

(『シャーロット・ブロンテの生涯』山脇百合子訳、大阪教育図書、2005 年、日本ギヤスケル協会監修『ギヤスケル全集』7 巻)

Langland, Elizabeth. *Nobody's Angels: Middle Class Women and Domestic Ideology in Victorian Culture*. Ithaca : Cornell UP, 1995

Rubenius, Nina. *The Woman Question in Mrs. Gaskell's Life and Works*. Cambridge, Mass. : Harvard UP, 1950.

Uglow, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. New York: Farrar, 1993.

青山誠子. 『ブロンテ姉妹：女性作家たちの十九世紀』. 朝日新聞社、1995.

足立万寿子. 『エリザベス・ギヤスケル：その生涯と作品』. 音羽書房鶴見書店、2001.

栗栖美知子. 『Brontë 姉妹の小説：「内なる」アウトサイダーたち』. リーベル出版、1995.

矢次 綾. 「女性の同胞意識：ギヤスケルが短編小説に描いた独身の女性たち」.
『ギヤスケル論集』13 (2003) :39-48.

(日本大学准教授)

Abstract

For What should a Spinster Live? : Opinions Secretly Exchanged with the Password “Anne” between Elizabeth Gaskell and Charlotte Brontë

Tomoko KANDA

When the 1851 Census showed that the population of women had come to greatly exceed that of men, the surplus women became the focus of public attention. How and for what should spinsters live if they were kept “out of woman’s natural work” as a wife and mother? Most Victorian middle class people believed this to be the only worthy employment for women. Elizabeth Gaskell and Charlotte Brontë also showed acute interest in this question. This paper offers the following hypothesis. These two female writers had exchanged their opinions on the question even before they got acquainted with each other: by embedding messages in their works with characters’ names as passwords.

At the beginning Brontë chose as a password the name “Anne”, this being the name of a girl in one of Gaskell’s works who says to the plain heroine, “you’re as born an old maid as ever I saw”. Probably Brontë associated “Anne” with “one” and “single”. The two writers then made characters with names which included “an” or “ann” (as in Mary Ann, for example). These characters are mostly old maids, and if not, are at least concerned with the old-maid question. Whenever transforming their characters’ names — for example, from Ann to Annabella — Gaskell and Brontë made them maintain a different opinion about the old-maid question, or a different way of living as an old maid, from their predecessou.

This paper shows the process of a hidden discussion between Gaskell and Brontë, and highlights the difference of their opinions on an old-maid’s aim in life.